

令和7年神奈川県議会第1回定例会 社会・健康対策特別委員会

令和7年3月10日

◆鈴木ひでし委員

私は、今日の7ページから9ページまでの食品ロスについてお聞きしたいと思うんですが、まず神奈川県食品ロス削減計画、見ていて、何点か素朴な疑問を聞かせていただきたいんだけども、これ一度、この計画について、委員会なり何なりで話題に上りましたか。

◎資源循環推進課長

この食品ロス削減推進計画でございますが、こちらの計画につきましては、常任委員会等という形になろうかと思いますけれども、報告をさせていただき、一定議論をしたというふうに承知しております。

◆鈴木ひでし委員

今、かぶつたら失礼だと思って。私見ていて、この計画を見ていて、2ページ、分かりますか、この計画の位置づけなんだけれども、2030年までの9年間もかかって、要は半分にするというんだよね、基本的にはこの計画は。ところが、その時代の経済状況とか、また食品ロスを取り巻く変化があったときには、必要な見直しを行うと書いてあるけれども、普通計画をやるときに、ロードマップというのは当然ついていて当たり前なんだけれども、どこにもロードマップは見えない。これ、何でなんだと。

だって、そもそも終わりました、はい、30年で半分になりましたというんだったらいいけれども、基本的にあなた方がつくるものって、温暖化計画もそうだけれどもさ、達成できそうもないようなものを一生懸命何かいろいろ目標を、今の時点でですよ、求めてているよね。そうすると、裏を返せば、その下に矢印で、市町村の食品ロス削減推進計画とあるならば、いや、同じページですよ、下の中に、あなた方が目指すものと、市町村というようなものは、矢印が下でなくて、双方向になって、削減するという図にしなきゃ、そもそもおかしいんじゃないの。だって、あなた方が目標を掲げて、県としてやるわけであって、市町村も当然削減計画に乗るわけだよね。どう考えているの、これ。この図とか、もう失礼ですけれども、めちゃくちゃじやん。いいよ、特別委員会だから、後ほどどううと何だろうと構わないからさ、時間もあまりないから。

◎資源循環推進課長

矢印の方向のところは、すみません、県の計画と、その上に上げるというか、何を受けてというところは、食品ロス削減の推進に関する基本的な方針という國の方針を受けてというところでございます。國の方針の中でも、県が目標に掲げている2030年度までに半減という家庭系食品ロス、それから事業系食品ロスも半減というところ、それは市町村も県も同様に取り組んでいるところでございますので、そういう意味では、矢印が片方向というところはありますけれども、連携して取り組んでいきたいというところです。

◆鈴木ひでし委員

常任じゃないからこれ以上詰めないけれどもさ、まずこんないい加減な図、作らないほうがいいんじゃないの。

二つ目、この右側の食育推進計画と温暖化対策計画というのがあるけれども、食品ロスがどれだけ、要するに温室化に大変な影響を与えているのかというようなこと、この計画の中、どこにも書いていないじゃん。これ、どうして。どこにも書いていないよ。少なくとも私が学んだ中では、全国や全世界の飛行機が運航して出す温室効果ガス、また金属等々の加工のために出すと、同じぐらいのロスというものは、それだけ大変な被害を及ぼしているんだというふうに、少なくとも私は理解しています。

その中で、何もこれ書いていないでさ、計画でもって30年までやりましょうなんて、これはないんじゃないの。常任じゃないからさ、今からつけろなんていふようなことは言わないけれどもさ、せめてそれぐらい考えてくださいよ。よろしくお願ひしますよ。

◎資源循環推進課長

委員の御指摘のとおり、この食品ロス、一番のメッセージとしては、1人1日当たりの食品ロスの量が、お茶碗1杯分に値するとか、おにぎり1個分に値するとか、そういうところが一つございます。家庭系ですとお茶碗半分分とかあるんですけども。

ただ、やはりCO₂削減、これは食品だけに限りませんが、先ほど来プラスチックごみも含めてですけれども、廃棄物の焼却等に係るCO₂の量というのは当然影響がございますので、ただ、委員の御指摘のとおり、そういったところの数値的な部分とかは計画に位置づけていないのは、御指摘のとおりでございます。

◆鈴木ひでし委員

今更計画を変えろとか何とかと言えないから、常任じゃないんで、ある意味で楽にやらせてください。

その中で、私はこの削減計画の中の11ページで、具体的にこの食品ロスの推計ってあるじゃないですか。御飯1杯分だ、やれ食べ残しだ、これどんなふうにこの推計って出すもんなんですか。

◎資源循環推進課長

こちらにつきましては、県内の家庭系の食品ロスの発生量の推計でございますけれども、これは県と市町村で作成しました、家庭から排出される食品廃棄物に占める食品ロスの調査マニュアルということで、市町村の実施した調査を基に推計しているんですけども、実際はこの開封検査といいまして、ごみを実際に開けて、それでどういった内容物が、直接廃棄によるものなのか、食べ残しによるものなのか、過剰除去によるものなのか、そういったところを確認して、そこで推計しているというところでございます。

◆鈴木ひでし委員
サンプルはどれぐらい。

◎資源循環推進課長
可燃ごみの中でサンプリング調査を行っておるところでございます。その量については…。

◆鈴木ひでし委員
いいですよ。分かんかったら分かんないで、常任じゃないから気楽にやってくださいな。

私ね、まずこの推計というのはどんなふうになされるものなんだろうと。これひょっとしたらば、ある意味で推計ですから、サンプリングの量によっては、またサンプリングの例えれば場所等々によっては、大きく違わないかという素朴な疑問を私は持ったわけ。それでちょっと聞かせていただいたということです。

課長、いいですから。言っている意味分かんないから、分かんないなら分かんないと言ってください。お互い時間がないですから、そんな感じにしましょう。

その中で、私これを見ていて、もう1点素朴な疑問として聞かせていただきたいんだけども、この消費期限と賞味期限ってあるじゃない。これ、先ほど後ろの課長も、何かセミナーか何かでこれをやりましたと言うけれども、私ね、自分でいつもいつも思うことがあるのよ。これ、ぜひとも聞いてみたいなと思って。

消費期限は分かりました。ある意味で、もうそれ以上食べたら体に悪いよというもんだよね、はっきり言って。そこまでいったら。賞味期限というのは、どこまで延ばしたらいいのかって、みんな、あるデータ調査によると44%の人が自分で決めると言っているんだよ。確かにそうだ、色が悪かったり、白いものが黒くなったりさ、そんなことだったのかもしれないけれどもさ、賞味期限って、一体そもそもが…いけない、その前に聞くことがあったんだ。

直接廃棄っていうんだっけ、これ何廃棄っていうんだっけ。食べ残しの次に出てくるの。食べ残しの後に22%ぐらい、20%あったじゃない。何でしたっけ。直接廃棄っていうんでしたっけ。

この直接廃棄という中はどんなものなんですか、ものは。

◎資源循環推進課長
直接廃棄、ものはいろいろ、様々な食品がありますけれども、直接廃棄は、要は未開封の食品であったりとか未加工の食材等で、それに対する食べ残しは開封済みの食品であったり、加工済みの食材であったりというところです。

◆鈴木ひでし委員
私は単純に思ったんだけども、それこそまさしく賞味期限の問題なんじゃないかと私は思ったわけよ。私だって、冷蔵庫に入っていて、知らないで食べてみてから、半年前だったとかあったけれども、でもおいしかったなみたいなさ、そういうようなことがあるよ。賞味期限までのほうがおいしいと書いてあるん

だけれども、私自身としては賞味期限切れてもうまかったと思った。だけど、本来なら食べていいものなのかなと思うわけじゃない。何でそんなもの食べたのとうちのに言われて、食あたり起こしたら、あんたの責任だと私も言われましたよ。だけど、賞味期限というのは、どれくらい過ぎたらいいものなのかなとかって、何を見たって書いていないよね、これ。これ、とても無責任な制度だなと、私は思うんだよ。

いや、それは今私に言われてもと、多分課長は思っているだろうから、答えられなければ答えなくていいんだけれども、私はこれを見ていてね、今、直接廃棄というようなもの、そのもの自体がそうなんじゃないかと。これは大変なことになると。要するに賞味期限はそのまま賞味期限でおいしくいただけるものだというけれども、直接事業に関わる方からすれば、これはやばいと。やっぱり賞味期限としてどんどんこれは捨てていかなければ大変なことになるぞというような思いを抱かせたとしたら、これは大変罪なことだろうなと私は思うわけよ。

これに対して何か考えていることはありますかね。

◎資源循環推進課長

賞味期限は、消費者庁のホームページ等によりますと、おいしく食べができる、賞味期限という名称も、例えばおいしい目安とか、そういった分かりやすい表現にするというところも考えられているところでございまして、国のはうでは、本年2月からこの3月にかけて、食品期限表示設定のためのガイドラインにつきまして、今パブリックコメントを実施して、そういったガイドラインのところで食品期限表示の設定に係る、やはり委員が問題意識をお持ちになっているような、やはり賞味期限の表示によって、まだ食べられるであろうものも言わば捨ててしまうということも発生しかねないと思いますので、そういったところ、国のガイドラインの検討等も踏まえながら、県のはうもまた、先ほど先行会派の答弁で申し上げましたけれども、食品ロスの、今、事業者系食品ロスでいえば半分のところを60%削減にというところの見直しのほうも含めて、こういった表示のところも国の検討内容を踏まえて、計画の改定なども検討してまいりたいと考えております。

◆鈴木ひでし委員

課長、さっきセミナーで食の安全・安心をやっているといって、皆様方、すごく納得されていたというけれども、こういう話は出ないの。

◎生活衛生課長

具体的にこのセミナーの中で、今、委員がおっしゃるような内容が出たかは、今手元にはないんですけども、確かにその期限設定ということは、基本的には製造する事業者さんが、先ほどありました国が定める期限設定のガイドラインに基づいて決めているというところにはなります。それを過ぎたらいつまでというのは、なかなか今まででは分からぬといふことが多かったと思いますので、そういうことでやっぱり期限が切れたものは控えておこうということから、これまでがそうだったのかなといふには考えていますが、今、食品ロスという

問題が社会的に大きな問題になっている中で、それを少なくしていこうという中では、消費者も期限設定をする製造メーカーのほうもそういったことを踏まえながら、食品との関わり方、期限の設定の仕方、こういったことはまた一歩進めて取り組んでいくべきなのかなというふうには考えております。

◆鈴木ひでし委員

今の課長さんからの答弁があつて、少しでも前進したら、ぜひともユーチューブかなんかでもってちゃんと県民の方に知らせていただきたい。かなチャンTVとかというのがあるんでしょう。何でもやっちゃってくださいよ。どうですかね、今の。賞味期限という問題について何か前進があつたならば、連携を取っていただいて、それをまた県民の方に知らせてあげていただけませんか。

◎生活衛生課長

今、御意見を頂きました、御提案を頂きましたそういったことの県民の皆さんへの周知については、食の安全・安心のホームページでもそういう動画のページなんかもございます。今、委員から御提案がありましたかなチャンTVとか、そういういった媒体なんかを活用して、フードロスということも踏まえた賞味期限の考え方、食品の選び方、そういうものは何か工夫して発信していきたいというふうに考えています。

◆鈴木ひでし委員

私は、本当に見ているとこの食品ロスってね、そもそもがそういうところでしようと私は思ったんで発言させていただいた。これ、事業者の方々、こういうようなことの少しでも一歩前進の答弁があれば、私、大分違ってくると思いますので、ぜひともお願ひしたいと思います。

最後に、こちらも先ほどから出てきているこのフードロスのための子ども食堂をひっくるめたことについて、先ほど課長さんに答弁してもらったのが、私が昨年、一昨年の一般質問でもって、とにかく港に着いてぶつ壊れた、箱が壊れて直接破棄するようなものを全部きちんと県等々でそれをストックして、各子ども食堂等々に配つたらどうかという提言が実現して、NHK等々でも放送してくださって、多くの方から、お肉がいっぱい入っているカレーとか、喜んでいらした映像が送られてきて、私もすごくうれしかったと思います。

ただね、1点、一つは課長、お聞きしたいことがあるのは、ここにも出ているんだけれども、子ども食堂、フードドライブ、フードバンクとかつていっぱいあるんだよ。これ、県民の方ってさ、何がどうだか、この仕組みが分かんないんじゃないの。

私は、先日あるところにお邪魔して、実際に食事をされているところを見させていただいたけれども、その場合は中核のフードバンクからデリバリーされる。だけど小さな、要するに数人でやつていらっしゃるところは、そこから直に情報も来ないというようなお話をちょっとお聞きをした。フードバンクだ、フードドライブだ、いろいろあるけれども、何がどうしてどうなったというようなことが分からぬ中、一生懸命やってくださる方がいっぱいいらっしゃるような

気が、私はするんです。要するに少人数のところですよ。
これに対して、どう考えていますかね、県としては。

◎企業連携・SDGs推進担当課長

私ども、中核的なフードバンクとともに、継続して意見交換というものをこれまで進めてまいりました。その先の地域を支えてくださっているフードバンクさん、そういったところにつきましては、中核的なフードバンクのほうから情報提供をしていただくように、今後連携して進めてまいりたいと考えております。

◆鈴木ひでし委員

いや、連携はいいんだけども、私は何でこんな質問をさせていただくのかというとね、今、先行会派の方がおっしゃっていた、直にスーパーマーケットから子ども食堂にと、私、こういう何かエリア、エリアの取組というのを、せっかくあなた方が第1弾をやったんだったら、24年8月か、記者発表したの、もう半年か、LINEチャットでこういうことができるもんであるならば、こういう事例というようなものを県が形にしてあげればさ、もっともっとコスト的にも絶対に助かるし、私、そう思うんですよ。エリア、エリアでもって、輸送がすごく大変だとか、どこどこじゃなければそこに取りに来られないとかというコストを考えたならば、LINEチャットでこんな形ができるもんであるならば、インフラをきっちと県としてつくってあげればいい。県じゃなくてもいいや、市町村でもいい、助成金なり何なりでもって出してさしあげて、LINEチャットで、こういう一つのやっぱりスーパーからそういうような形でも出てくるものがあるならば、私も何件かお邪魔した子ども食堂の方々がおっしゃるのは、本当にもっと幅広にいろんなものが欲しいとおっしゃっていた。もちろん、それはそうですよね、いらしたお子様、当日は豚汁だったんで、すごく喜んで、豚肉がいっぱいだと食べていらっしゃったんですけども、やっぱりシェフを経験されたオーナーの方々というのは、もっともっといろんなものを幅広にやりたいけれども、食材が、いろんなバラエティーに富んだものが近くにあればいいですねとおっしゃっていたもんですから、この機会に、ぜひともこの昨年8月28日に記者発表した、こういう一つの子ども食堂へのエリアから直接そういう形でもってできる仕組みというのも、ぜひとも一つ検討していただきたいけれども、どうですかね。

◎企業連携・SDGs推進担当課長

LINEのオープンチャット機能の仕組みですけれども、LINEのオープンチャットというのは、安価な形ですぐできるといったような仕組みでございます。ですので、こういったふうにできるよというようなことを積極的にSDGsパートナーミーティングですとか、それから中核的フードバンクさんのほうでやられている会合、そこにはほかのフードバンクさんも来られておりますので、そういったところでこういう仕組み、簡単にできるよ、安価にできるよといったようなことを発信していきたいと思っております。

◆鈴木ひでし委員

課長のまとめみたいになるけれども、やはり既存のシステムはシステムである。これはもうどうしようもない。今までやってきていることがあって、実績がいっぱいあるわけですけれども、そこを一つ一つやっぱり現場に合わせていくというような御努力を県としてしていかないと、やはり現場で本当にすごく食材を求めていらっしゃるところに行かない、なつかつ今は野菜にしても、お米にしても大変高い状況下の中で、逆に地域の方々に本当に根差して、皆様方がやってくださっているんですけども、より小さなところというところが物すごくやっぱり大変な運営をされている状況を私も拝見したもんですので、ぜひともこういう一つの流れがあるようでしたら、対応をしていただきたいということをお願いして、質問を終わります。